

やくおうじ 薬王寺

薬王寺のお堂には、文化財に指定された仏像や彫刻がたくさんあります。その中でも一番大きな仏像は高さが約2.7mもある薬師如薬坐像です（堂内の仏像は通常非公開となっています）。

薬王寺の「薬王」とは薬の王様という意味で、あらゆる病気や悩みをいやす薬師如来の別名です。今から約1000年前の平安時代のもので、1本の木を削ってつくられました。また、のき先には2匹の竜の彫刻があり、生きていますかのよう^{うご}に動いた^{てんせつ}という伝説もあります。

薬王寺には遊歩道^{ゆうほどう}もあって、春から夏にかけてはサイコクヒメコウホネ^{サイコクヒメコウホネ}や大賀ハス^{おおが}といった植物^{しよくぶつ}を見ながら散策^{さんさく}を楽しめます。



大賀ハス



サイコクヒメコウホネ



薬師如来坐像

薬王寺の上り竜と下り竜 ~『可児のむかし話』より~

むかし、むかし。帷子ちゅうところであったことや。毎日、毎日、ひでりがつついて、田んぼも、畑も、そろも、からからにほしあがってしまったんやと。そんなもんで村の人は、こまっしてもうて、くる日も、くる日も、薬師堂^{やくしどう}にこもって、雨ごいのおいのりをしたそうじゃ。

ある日のこっちゃった。ひとりの年寄り^{としより}がな、おいのりにくたびれてまって、お堂から出て、薬師堂の階段に腰をおろしたげな。なにげなく、頭の上を見あげて、高粱^{たかばり}に彫られた竜を見とった。

「さすが名人といわれた林市衛門^{はやしちやもん}と玉置吉兵衛^{たまおききちべゑ}が作ったものだけあるのう。みごとなもんじゃ。」

と、みとれておると、下り竜の舌がぺろぺろと動いたのやと。びっくりして立ち上がると、こんどは上り竜の尾がびりびりと動きよった。そんで思わず、

「竜よ、心あるなら聞いとくれ。この村にはな、もう一か月も雨が降らん^{ふり}のや。なんもかも、すっかり枯れてしま^{かわ}いそうじゃ。奥の池も干上がってしま^{かわ}うた。おれんた百姓が、いちばんこまっするんじゃ。お前がほんとうに水をよぶことができるんなら、一雨恵んでくだされよ。」

と、いっしんに手を合わせんさったと。そのとき、ふしぎなことがおこったんや。にわか^{くろくも}に黒雲がひろがってな、稲妻^{いなづま}が光り、雷がなり、ものすごい雨が降りだしたんじゃ。降って降って、降りつづいたちゅうこっちゃ。

あんまり降りつづいたもんで、こんどは大水^{おほみづ}がでよって、あぶななってきた。そこでその年寄りは、また、薬師堂へいって、

「いくら雨がほしいたって、池があふれ、堤が切れてしま^{かわ}っては、もともこもないわな。」

と、えらい怒ってなも、いなづまの光る空に向って、弓で矢を放ったんじゃ。そうすると、たちまち、雷鳴はおさまって、西の方から明るうなってきたんや。そして、水のひいた田んぼや、畑はだんだん、生き生きしてきたそうや。

村のしゅうはよろこんで、薬師堂にお礼にござったわな。そして、ふと高粱の竜を見上げるとな、ふしぎなことに、下り竜の片目がつぶれとったちゅうことや。

